

んだん2人は身も心も離れて不幸になった事例は多い。人間の常として現在の不満が解消されたらそれだけでよい、あとは何もいらないと感ずるものである。病人がこの病気がなおりさえすればあとは何もいらないと感ずるのは無理からぬことではあるが、いざなってみればまた別の願いがあるのである。桶の側をつくる1枚の板だけを高めても水の容量は変わらないのと同じように、やはりわれわれは桶の上限をそろえつつその上限を高めようと努力するところに幸福の真髄があるのではなからうか。

人が住み慣れた場所を離れ、その居所を他の地域に移動させることが人口移動である。なかには自分の意志に基づいた自由移動ではなく、強制的に移動させられる強制移動もある。しかし後者は別として自由移動の原因をよく一般に経済に求めて説く人が多いが、人口の移動を経済のみに求めるのはどんなものだろうか。経済的要因も否定はできないが、全てがそうとは思えない。地域から人を押出す力、また別の地域の引きつける力を経済的要因にのみ求めるのは早計であり、そこに住む人の選択の基準は金だけではなく、生活全般であり、広い意味の幸福を求め、仕合せな生活のおくれるためのものと考えたいものである。

迷子になる話

木内信蔵

ミセス木内は私を助手席に乗せて車を運転しながらよくつぶやく。「都市地理学者のくせにどうしてこう道や方角を知らないのでしょうかね」。車の航海士である私はいこう答える。「東京の街が合理的に作られているなら分るさ。東京は出たためだもの」と。11月の初め親戚のお通夜に教えられた通りに行こうとしたが、結局ぐるぐる廻って家に分からなかった。別の者もその家を発見するのに小1時間を要した。港区の台地上の一角である。

東京の山の手は地形の複雑さがある上に、町が無計画に発達したから、路は細く曲って、通ったストリート大路はまことに少ない。江戸時代にはこのような状態にしておくことが防禦上便利であったかも知れないが、明治いらい昭和になるまで、放っておいた市(都)の考えが分らない。関東大震災後に発達した市部の外側、戦後の郊外市も、大部分は改善されることなくお百姓さんが肥え車を引いた路を淑女がハイヒールで歩き、バスは電信柱を侵食しながら通り抜ける。

ヨーロッパの古い城内も迷路であるが、教会や広場が結び目になって結局は目的地にたどりつけ

る。直線状の道路であって誤りやすいのは放射街路である。満州の新京（長春）ヤパリで道を一筋とり違えたために大損をしたことがある。6月に訪れたカルルスルーエもバロック式市街で、宮殿を中心に放射状の道が走るが、マンフォードは、「都市の歴史」の中で放射は防衛のためだとはっきり書いている。

ヨーロッパの街もアメリカの通りも、名前がついて、中心から離れるに従って番号が増える。その上、家の扉には大きく番号が書かれているので、言葉が通じなくとも、宛名さえ正しく知っていれば目的地にたどりつける。日本では地番が改められたが、必ずしも家々には大きく表示していない。八百屋の角を曲って右へ三軒目の横丁などと言われても、そこへ行くまでは分からない。私は目的地の近くまでたどりつくと、目星しい建物の傍の公衆電話でどのように行くのですかと聞くことにしている。あるとき電話をかけたら僅か三軒目の隣であった。

新しい町名地番表記も街区（ブロック）式であるために、地図を持たぬ人には不親切である。丁目も地番のつけ方は行って折返す式であるから、どこまでどの方向に進むのか？番号が全体で何番まであるのか？そのようなつまらぬことで足を棒にする。最近はおもな交叉点の信号に地名が書かれて便利であるが、市販の地図には町名はあっても地点名や歴史的に有名で人々にも愛用された町名が書いていない。例えば「溜池」と言う交叉点を探してごらんなさい。

これらの点で、京都市は道路が碁盤割で、通り名があり、四条烏丸上ル、下ル、東入ル、西入ルで、目をつぶっていても地点と街区が理解できる。その上に、東山、北山が見え、五重塔が立ち目標となるものが多い。平和な古都はさすがである。

公害をできるだけ少なく

大和田 順子

今年は学園内の銀杏の紅葉が見事なほど美しい。やわらかい秋の日ざしを浴びて、美しく黄ばんだ銀杏のこんもり茂っている様子を見ると、秋の深まりを感じ、今更の如く学園も美しいなと思う。黄ばみかけた銀杏の葉の葉脈にまだ青味を残しているのも可愛らしい。一枚二枚ハラハラと舗道に散りしいてゆく様子もあわれである。この様に紅葉が美しいと、やがて来る木枯の吹き荒ぶのを止めたいような気持になる。

さて、今年の紅葉がこんなに美しく立派だったのは、例年になく寒さが早く来たためなのか。そ